

ネット原理主義

ブログを作るようになってから、当然、ネット上で公開されている様々な情報や意見を読む機会が増えた。参考になる意見も少なくないし、様々な数学の教科書的な解説などには結構便利なものもある。しかし、ネット上に公開された「意見」のようなものには、ネットならではの特徴があつてなじめない。一言で言えば、ネット上の意見はほとんどすべてが原理主義的で不寛容である。別に右翼がどうした左翼がどうしたなどというイデオロギーについて言いたいわけではない。こういうイデオロギー的なものに限らず、意見が原理主義的になるのがネットの特徴だと言いたいのである。おそらく、そういう書き方がしたくて書いているのだろうから、それが悪いという気もないが、何でそうなるのかは面白い。

ネット以外で意見を述べる場合は意見を述べる目的がある。多くの場合、語り掛ける相手と自分の意見が違ふと思つているから意見を述べる。同じ意見ならば、意見を述べることに実用的な意味はあまりない。せいぜい、意見が同じであることを確認して共感を得る程度の機能しかない。そうだとすると、多くの場合、意見を述べることに実用的な目的は他人の意見を変えることだ。「説得」に近い。「説得」することによって何かの利益が生まれる。ネットの外側で他者に意見を述べる場合は、多かれ少なかれ、その他者を説得しようとしているのだ。そのような他者が存在しないところで一人で意見を述べている人がいれば、その人はかなりアブナイ。意見を聞いている他者は多かれ少なかれ意見を述べている当人とは違ふ意見、異なる立場、異なる経験を持っている。こういう場合に、原理主義的なことだけ述べても相手を納得させることはできないだろう。実際にはある程度の妥協が必要で、相手の立場に対する理解や共感が必要になる。具体的に他者を目の前にして意見を述べるときに原理主義的にならないのはそのためだろうと思う。ところが、ネットの場合には、説得する相手を目の前にしていない。あるいは、自分と同じ意見の人間を読者に想定しているのかもしれない。こういう意見の表明には、仲間意識の確認以外の機能はない。だから原理主義的に書けるのだろうし、書くのだろうし、書きたいのだろう。いろいろな意見を統合的にまとめて、ある解決方向性を示すような意見ならば、目からうろこが落ちるということはありそうだが、原理主義的な意見の内容は大体すでに良く知られている考えだから、それを読んで大変勉強になるなどということはない。それでも、仲間内から評価を得たいという願望も不自然ではないから、書いている人がそれで楽しめるならば、それはそれで構わない。

困るのは、そういう原理主義的な意見を世論だとして利用しようとする政治家や「評論家・文化人」が出てくることである。政治・政策とは、様々な人々の間に成立する妥協だ。原理主義で政治をやられても困るし、原理主義を世論とされても困る。自分は良くわかっているのだという前提で、真っ青になつて一生懸命にどうでも良い意見を述べられても、聴いている当方も困る。それ以上に、原理主義に対しては反対の原理主義が持ち出されて

くるから、もっと問題の解決を困難になる。原理主義は現実の中で解決を模索する実務家の大敵である。

ということで、このブログでは原理主義的に物を述べることを避けることを心がけているが、それはそれで難しい。もっとも、私が書いたことに対するコメントについては、支持・不支持を問わず、別に原理主義的に書いていただいても構いません。それも参考にさせてもらうつもりです。